

ソーレでは、内閣府による「女性に対する暴力をなくす運動」期間（毎年11月12日～25日）に合わせ、DV防止啓発講演会を行っています。今年度は宇治和子さんをお招きし、DVから回復するためにサポート・ケア支援の必要性や重要性についてのお話しをしていただきました。

うじ かずこ
宇治 和子 さん 所属：郡山女子大学短期大学部幼児教育学科准教授



【プロフィール】

奈良県の出身、臨床心理士・公認心理師であり、関西の公的DV被害者シェルターで長く心理職として勤めた。

2015年、奈良女子大学で博士号を取得。テーマは「DV問題と向き合う被害女性の心理-彼女たちはなぜ暴力的環境に留まってしまうのか-」。

2018年から大学教員となりその後、郡山女子大学短期大学部幼児教育学科准教授として2021年から現職。

【DV及び「面前DV」の基礎知識】

親密な男女関係において繰り返される暴力は、DV（ドメスティックバイオレンス）として広く知られるようになってきた。DVには様々な暴力の種類があり、身体的暴力・精神的暴力・性的暴力・経済的暴力・関係性に対する暴力（宇治，2015）がある。2001年に制定されたDV防止法により、日本ではDV被害者への支援体制が徐々に整備されてきているが、精神的暴力が法律で保護命令の対象となったのは最近のことである。

また、子どもが受ける「面前DV」については、2000年に児童虐待防止法が制定され、2005年の法改正で、子どもがDVを目撃することを心理的虐待として定義された。

男性も女性も被害者になり得るが、体力差などの影響から、女性の被害者が多いことが内閣府の調査報告でも明らかにされている。

【親密なコミュニケーションでこそ起こる】

テレビドラマのように「突発的に起こるDV」というのは、実際にはほとんどない。加害者は相手を選んで行動し、自分が悪いとはほとんど思っていない。被害者はもちろん、場合によっては加害者自身も、「何が正しくて、何が間違っているのか」が次第にわからなくなってくる。

表面上は対等な関係に見えても、二人の間には見えない圧倒的な力の差が生まれていて、関係性を変えたくても変えることができず、簡単に抜け出すこともできない。

この問題は、誰にでも起こり得る。自分自身や周囲の人々にとって他人事ではないという意識を持つことが大切だ。

【関係性に対する暴力～逃げられないメカニズム～】

関係性に対する暴力とは、DV 加害者は被害者本人だけでなく、被害者が最も大切にしている親や兄弟などに危害を加えると脅すことである。このような脅しは直接的な暴力ではないため法律で取り締まることが難しく、結果的に被害者が逃れられない状況を作り出してしまふ。また、加害者が明らかに悪い状況にもかかわらず、被害者が「自分が悪いのかもしれない」と考えてしまう心理的なメカニズムも問題の一つだ。このような状況により、被害者が逃げ出すことをためらうケースが多々ある。

【親子関係への影響】

家族内の人間関係は、ヒエラルキー（階層構造）として捉えることができる。これは家族力動で、身分制度のようなピラミッド型として表現したものになる。ピラミッドの最上位には力の強い人が位置し、最下位には立場の弱い人が位置する。

たとえば、父親が DV の加害者である場合、父親がピラミッドの最上位となる。子どもは、母親が父親から暴力を受けている姿を見て、母親を「かわいそう」と感じる一方で、「頼りない」と思う。自分よりも弱い存在として認識するので、母親が最下位となる。

この結果、親子関係における愛着が安定せず、子どもが母親の言うことを聞かず、トラブルが生じるケースが多くなっている。

子どもが DV を目撃することは、心身の発達に深刻な影響を与える。たとえば、男児の場合、暴力的な解決方法を身に付けてしまい、乱暴な言動や破壊的な行動を繰り返すようになる。頭では「やってはいけない」と理解していても、感情が揺れた際には暴力を選択してしまう傾向が見られる。トラウマティックストレスが原因で、自分の頭を叩いたりパニック状態になったりするなど、解決できない恐怖や葛藤に起因する行動も報告されている。一方で、女兒の場合、抑うつ的な傾向が強まり、不安や不眠、記憶の混乱、大きな音や怒声に対する過剰反応（パニック状態）といった症状が見られることがある。年齢を重ねるごとに、これらの症状が顕著になる場合もある。

DV 被害者 50 人へのインタビュー調査では、18%の女性が「夫の家族も DV 家庭だった」と語っている。このように、DV は世代間で連鎖する可能性が高いことが示唆されている。また、DV 被害女性やその子どもたちは、PTSD をはじめとした精神疾患の罹患率が高いことも明らかになっている。

【再起する力を育む支援とは】

家族体制の再構築は、非常に困難を伴う。DV 被害を受けた親子には、不安定な家庭環境が多く見られるため、家族関係を再構築する支援では、被害者と加害者の双方の立場に配慮することが重要だ。家庭内で母親と子どもがフラットで平等な家族関係を築くことが重要であり、そのためには心理教育を取り入れる支援が求められる。

新しい生活環境への適応を目指して復帰プログラムへの参加を促しても、母親が受けたダメージが大きすぎる場合には参加自体が難しいケースもある。そのため、DV 被害後の親子を孤立させない支援が不可欠だ。伴走型の支援としてグループワークを活用し、自然な家族の平等感覚を学びながら、精神的健康を向上させる取り組みが効果的となる。

回復プロセスの中では、揺り戻しが起こることも予想されるため、支援は長期的かつ慎重に進める必要がある。また、子どもが行動上の問題を抱える中でも、楽しい体験を重ねることが重要で、子どもが楽しそうな反応を見せたり、自分の意見を主張できるようになると、それが支援の推進力となっていく。最終的に、当事者自身が変わろうとする意欲を持ち、暴力がないことを前提とする新しい家族体制を築くことが目標となる。社会全体がその再起を支援し、親子が再び力強く歩み出せるような環境を整えることが重要だ。